

## ■博士論文要旨

# 中国における伝統的 社会集団の歴史的変遷と その現状

—華北山西省農村を事例として—

陳 鳳\*

本論文は、中国村落社会における伝統的  
社会集団の歴史的変遷とその現状について、社  
会学における集団類型の概念を援用しつつ考  
察し、伝統集団が果たしてきた役割と現代的  
意義を明らかにしようとするものである。な  
お、本論文でいう伝統的社会集団とは、「宗族」  
と呼ばれる血縁集団と、「社」とよばれる地  
縁集団を指す。

中国の人々の社会結合において、血縁集団  
と地縁集団はきわめて重要な意味をもつのは  
周知のとおりである。というのは、農村社会  
を統治するにあたって中国史上の各王朝政権  
は、行政組織を村に設置することはなく、旧  
中国農村社会の基層構造をなしたのは血縁集  
団と地縁集団だったからである。このような  
伝統的集団が、人々の社会関係を結びつける  
紐帯であり、村落を運営する上で力を発揮し、  
それが郷村自治に多大な影響を与えていた。  
とりわけ、宗族は中国の長い歴史の中で連綿  
と受け継がれており、中国を理解する上で最  
も重要なキーワードの一つであることから、  
これまで国内外の多くの研究学者が宗族を分  
析対象として研究し、数多くの成果を残して  
いる。かれらはそれぞれ独自の方法論や分析  
視点で宗族にアプローチし、さまざまな議論  
を積み重ねてきたが、しかしなお多くの課題  
が残されている。

また地縁集団の「社」について言えば、そ  
れが村落社会で果たしてきた役割、宗族との  
関係、ならびに統治政権側との関係など、さ  
まざまな側面での考察を欠いているため、中  
国村落社会のもつ特性を十分に明らかにする

---

\* 神戸学院大学 非常勤講師

ことができなかった。

これらの課題を踏まえ、本論文は、序章、第一部と第二部の構成で、以下のように考察を行った。

序章では、中国社会の現状を説明し、中国研究において欠如している問題意識を明確にし、さらに本論文の研究目的、調査地の選定および論文の構成について論述した。

第一部では、中国における結合関係を再検討するために、宗族と社のそれぞれの結合の類型化を試み、類型間に関する諸問題を中心に論述した。先行研究をみると、南方地方の宗族結合が強固であり、北方地方の宗族結合は脆弱であるという見解が多く、研究者に共通する。しかし、宗族を集団としてみた場合、その結合の本質の違いと南北結合の差異および差異を生みだした要因に関する問題についてはあまり論じられていなかった。社も同じく、その結合の契機と結合の本質に着目して類型化する試みはなされてこなかった。そこで、第1章では、先行研究を中心に中国村落社会における諸問題を総覧し、第2章では、中国、日本と欧米それぞれでなされた宗族に関する先行研究を比較考察した。

第3章では、第2章の内容を踏まえ、先行研究中における宗族に対する見方の多様性と対立に関する具体的な見解について考察・整理し、第4章では、フリードマンと鄭振満の研究を事例に宗族の分類に関する見方を検証した。

第5章では、現在までの宗族研究における問題点を具体的に指摘した。すなわち、①従

来の宗族研究は、伝統的社会集団としての宗族の多様性をさまざまな形で描き出しているが、しかし残念ながら、社会学における集団類型を援用した分析は皆無に等しいといわなければならない。②これまでの分析においては、宗族結合は南中国が強固で、北中国が脆弱だと言われてきたが、いずれも結合の本質を論じているわけではなく、しかもその南北差異の要因についての分析も不十分なままである。③宗族は中国の各地に存在するにもかかわらず、南中国の宗族研究の方が、北中国の宗族研究より多いという偏りがみられる。宗族研究に量的な不均等性が大きいので、南中国の宗族の特徴を中国全土の宗族に普遍化するの是不適切だと指摘した。

第6章では、社に関する先行研究を概括し、地縁集団を研究する際の問題の所在を明確にした。その問題は次の3点である。①集団の分類の枠組が不明確である。②地縁集団と血縁集団との関係についての考察が不十分である。③村と「会首」および「社首」の地位をめぐる関係について不明確である。

第7章では、集団としての宗族と社の本質をどのように捉えるかについて、社会学における集団の分類基準を援用しつつ、筆者の宗族と社結合の類型設定の分析枠組みを提示し、宗族および社との整合性を検討した。その結果、長い歴史の中においてみた場合、自然的宗族が存在する一方、人為的要素を加味した宗族があるのも事実であり、成立動機においてそれぞれやはり大きな違いがある。したがって、宗族を血縁型宗族と利益型宗族に分

類するのが適切であると考えた。また、社の場合も、自然に結合した社もあれば、社会の変化とともに行政の機能も備える集団へ変わっていく社や、互助・ギルト的な特殊目的を達成するために結合した社もあり、それぞれの成立動機が異なり、大きく自然的と人為的に分けられるであろうと考えた。

第8章では、同姓・同宗という言葉のもつ意味を考察し、血縁集団としての宗族の成立根拠をもう一度明確にした。次に、本論の分析枠組に基づき、これまでの先行研究を使って、血縁型宗族と利益型宗族の成立動機とその歴史の変遷をおさえ、そこにみられる具体的な差異を考察した。

第9章では、血縁型宗族と利益型宗族の特徴について、同宗の意味と改姓の目的、族譜編集の目的、宗族の成員資格の獲得、宗族成員間の親疎と尊卑関係、祖先祭祀の目的と対象、贍族の目的と対象という6つの項目を設けて、南中国と北中国における宗族の差異を検証した。その結果、南中国の宗族は早くに血縁重視の風潮が廃れたのに対し、北中国では、血縁による親疎関係と年齢による尊卑関係が厳然と重視されることで、伝統的な古い社会関係が残っていたことが明らかとなった。

第10章では、宗族間関係ならびに宗族と族人の関係、宗族が所有する土地の比較、土地所有者と小作人の関係の比較を通して、南方と北方の宗族の差異の要因について論述した。以上の論述を通して、経済基盤の相違が、南北中国における宗族結合の差異を生み出した要因の一つであり、成員の結合の本質を規定

した要素であると考えた。

結論としては、宗族集団は時代、生活環境、社会状況や経済基盤などが変化すれば、その結合形態も変化し、多様な存在形態として現われる。多くの研究者は自らがみた宗族集団に対し、過去に変化を経験し今後も変化するであろうと予測しつつも、その結合形態があたかも普遍的なものであるかのように捉えがちである。だが、集団としての宗族の成立根拠と成立動機に着目し、これまでの多くの研究成果ならびに筆者自身が実施した調査結果などを踏まえて検討すると、中国村落社会において、様々に描かれた宗族の中に、根底に根強く存在し続けている血縁型宗族と時代の変遷とともに変化し続けてきた利益型宗族と呼べる二つの類型があり、これが中国南北における宗族集団の布置状況と一定程度の対応関係にあることを、本論は論証しようと努めた。

もちろん、現実にはどの宗族も純粋に血縁型とか利益型とは言いにくい面をもち、血縁型にも利益的な要素が一定程度見られる。あるいは、今後も新たな結合形態が出てくるかもしれない。しかし、中国村落社会において現在も父系血縁集団が存在していることを考えると、人々が生活していくうえで宗族が今も重要な社会関係の一つだと考えられる。社集団も宗族と同様に、地域によって村落社会で果たした役割が異なり、また時代とともに機能的な性質を有する集団に変化することもあったが、村落社会において、きわめて重要な存在であったことを再確認することができ

た。

第二部では、華北山西省農村の宗族と社の歴史の変遷と現状について検証した。

第1章では、華北と山西農村に関する先行研究を整理し、この地域の研究に関する問題の所在を明確にした。第2章では、調査対象、調査方法と調査概要について論述した。調査対象とした村は華北地区の典型的な雑姓村で、2012年7月時点で、戸数1,262、人口4,500弱の村民を擁する行政村である。具体的には調査村を選定した理由と調査対象の宗族および社を選定した経緯、調査期間と調査内容について述べた。第3章では、山西省の概況と特徴、調査村の行政区画と村内組織の沿革、経済、教育および特性について論述した。

第4章では、宗族の歴史と現状について論述した。まず調査村における馬氏、閻氏、李氏という三つの宗族を事例に、それぞれの宗族の起源と現状について考察した。次に、宗族成員間の関係と宗族機能、家長の役割、相互扶助という項目にわけて検証し、そして、宗族にとって重要な行事である祖先祭祀を取り上げ、祭祀の理由・対象・方法・規範・費用の負担について考察し、明らかにした。さらに李氏宗族の「銀錢流水帳」の記録から祭祀に関する歴史の変遷を検証し、最後に馬氏A支派を事例に族譜編纂の目的と契機を検証し、族人にとって族譜と宗族の存在意義についても論述した。

第5章では、地縁集団である社の歴史と変遷について論述した。まず、調査村の社の種類、起源と現状など基本的な点を押さえ、次

に、それぞれの社の活動内容と規模を紹介した。そして、貴重な歴史資料「銀錢流水帳」(1898年から1964年まで)の内容を検証し、社の役割と歴史の変遷を考察した。さらに、社単位で行われる「元宵節」の開催をめぐる組織者と参加者の関係、参加者の構成の変化とそれに伴う意識の変化、社会の変化と行事への関心の変化、行事開催への財源の影響について論じた。最後に、社首の選出と役割について考察した。

第6章では、宗族・社および村との関係について論述した。中国の歴史上、王朝時代の徴税組織にしても民国時代の村内組織にしても、後の新中国成立以降にできた初級・高級合作社、人民公社時代の生産小隊および現在の村民委員会の下にある区にしても、すべて伝統的集団である社を存続させようという意思が働いて設置された。したがって、行政の関与に代表される社会環境の変化とともに、人々の結合関係に一定の変化の兆しが見えるが、しかし、地縁関係は現在なお村民たちを結ぶ重要な紐帯であることが、現地調査から明らかとなった。

第7章では、宗族・地域活動における女性の地位の変遷という視点から、調査村女性の地位の歴史の変遷を考察した。考察から女性の地位は徐々に向上しているが、宗族においては男性優位の伝統的規範意識が依然として根強いことが明らかにされた。

結論としては、調査から、調査村にある宗族は、社会の変化に伴って、個々の家族の独立性が高まるにつれ、宗族機能が弱体化する

方向に向かっている中で、宗族の本質である祖先祭祀を通じて、自分の帰属性を明確にしようとする意識が今日でも根強く存続している。ただ、血縁の親疎関係を重要視するゆえに、世代の深化に伴って血縁関係の離れた成員間の結び付きは弱まる傾向にある。また、経済的な要因に影響されることが比較的少なかったため、宗族内部で分枝する傾向が見られた。現在、日常生活の中では宗族関係の存在を意識せずに生活しているが、村長選挙の時には宗族意識が強く表れ、作用している。投票行動を通して顕在化する所属意識を考えると、社会生活を送るにあたって、宗族関係を有することがきわめて大事で、村民たちはこの関係を一種の社会資源として活用している。このことより、宗族関係を有することの重要性が理解できよう。

調査村で生活を営んできた宗族の過去から現在に至るまでの実態を検証し、考察したところ、これらの宗族の成立の根拠は、存在の共同の媒介に基づき、宗族成員間に愛と親和感情が存在し、その成立の動機も自然的で、同じ祖先を有することを重要視し、血縁が近い人々が結合した血縁型宗族であるといえる。ただし、先述したように、宗族の中に社会的地位があり、経済的に裕福な人物が宗族内部で発言権を有するようになり、その力が台頭してきていることや、一部の宗族では女性が祖先祭祀に参加するようになってきた。これらの現象から考えると、将来、宗族がさらに変化する可能性を否定できない。

調査村の社に関して言えば、その多くは土

地と生活の共同の集団で、成立の根拠は存在共同の媒介に基づき、成立の動機は自然的である。国家権力の浸透につれ、社に納税や治安などの役割を付与し、成立の動機が人為的方向に傾く時期もあったが、現在も村の祭りや行事の単位として機能しており、土地と生活の共同が基本である事は変化していない。

また、一部の社は、成立の根拠が最初から作用共同の選択に基づく集団で、成立の動機は人為的であるが、その役割を終え、すでに存在しない。現在では経済型（企業）が出現し、新たな利益集団が生まれた。したがって、動的に見て、時代によって消失する集団もあれば、必要に応じて新たに結合する集団もあり、人々の関係が常に変化している。清水盛光の集団の二次元的分類方法が中国の地縁集団を分析する時に、きわめて有効であることが証明された。

いずれにしても、南中国においては利益的な宗族関係が人々を結ぶ主たる紐帯であるが、調査村においては、ともすれば分枝しかねない宗族の凝集力が社（地縁集団）の存在によって統合されている。村民たちが祖先祭祀などの宗族行事の時に宗族の一員として結集し、村の行事などの時に社（地縁集団）の一員として参加する。村民は地縁集団と血縁集団の重層関係の中にあり、両方をうまく使い分けている。その意味では宗族と社（地縁集団）の両方の機能が相互に補いあっていて、この両集団とも村民らが村落生活を送る上できわめて重要な存在であるとみてよいであろう。



このように山西省の人々が現在でも伝統的な血縁関係と地縁関係によって結束して生活しているのが明らかになった。今後、中国社会のさらなる変化に伴って、とくに農村の都市化によって、人々の移動が激しくなり、価値観が変化し、地縁で結ばれている人々の関係が脆弱になる可能性がある一方、地域社会の運営が村民の自治に任せられた現在において、行政の力が及ばないところで村民たちが結束し、自分の力で解決することがあるかもしれない。その場合には地縁関係がより一層緊密になるのであろう。また、逆の場合もあるかもしれない。どのような結合になるか、これからもその発展方向に注視していきたい。